

令和元年度 第 1 回 上 牧 町 総 合 教 育 会 議 議 事 録

- 日 時 平成元年 8 月 20 日 (火) 午前 10 時 00 分から午前 11 時 50 分まで
- 場 所 上牧町役場 2 階 第 2 会議室
- 出 席 者 今中町長、松浦教育長、暁委員、東谷委員、宮城委員、渡邊委員
- 事 務 局 塩野部長、丸橋課長、森本課長、千葉指導主事、岡田指導主事、
中川理事、俵本課長補佐、日高係長
- 次 第 開会
町長挨拶
案件 1 令和元年度教育委員会事業について
2 中学校国際交流事業報告
3 コミュニティ・スクールについて
4 その他
閉会

●議事概要

町長挨拶

- ・昨日、台湾の子どもたちとの国際交流事業が無事終わった。子どもたちの様子等含め、後ほど報告させてもらう。
- ・少子化がすすんでおり、歯止めをかけるのは難しい。その現実を受け止めながら、自治体でどのような協議をすすめていくかが、これからの大きな課題になってくる。
- ・コミュニティ・スクールという考え方が主流になってきている。そのあたりを踏まえてこれからの学校教育について意見交換を行い、有意義な会議になるようにしたい。

教育総務課長より、案件 1 令和元年度教育委員会事業について説明

社会教育課長より、案件 1 令和元年度教育委員会事業について説明

教育長より、案件 2 中学校国際交流事業報告

東谷委員 英語の得意な生徒が多く参加していたか。

松浦教育長 英語があまり得意でない生徒もいたが皆でカバーしながら楽しんでいた。現地で使われる言葉の大半は北京語であるが、各家庭へホームビジットをした際は自分たちで身振り手振りしながら会話をしていた。

今中町長 アンケートの中に「ホストファミリーとコミュニケーションが十分とれたか」という項目と、「大切だと感じたことは何か」という項目があるが、ここに「英語を聞く力、話す力が大切」だと多くの中学生が書いている。これが子どもたちの 1 番の学びではないか。英語を頑張りたいと感じてくれたことは、大

きな成果だとアンケートからは感じとっている。

- 東谷委員 現地での言葉は北京語がほとんどという話があったが、両国の子どもたち同士がコミュニケーションをとるときは、やはり英語なのか。
- 今中町長 英語。会話として成り立つような英語を話しているのか、単語で伝えているのかは別として、子どもたちなりに話をしていた。ホームビジット後、子どもたちが帰ってくるのを迎えたとき、子どもたちはすごく良い顔をしていた。子どもたちからもよかったという声が聞け、高評価だった。
- 松浦教育長 30名の枠を超えたら抽選としていたが、今回は全体人数、男女の比率、学校の比率すべてがよかった。2、3人の生徒を大人1人で見ることができたので、安全管理もしっかりできた。
- 暁委員 自分でコミュニケーションをとろうとする姿勢が大切。今回、自信を持って取り組むことができたというのはすごく大きな経験になる。積極的に話すことの大切さを感じてくれていたら、今後英語圏へ行くようになってくれるのではないのかと思う。

社会教育課長より、案件3 コミュニティ・スクールについて説明

- 暁委員 すでに学校では地域や保護者、学校が関わっている活動がされているが、コミュニティ・スクールになることで、明らかに変わることは何か。熱心に活動してくださっている地域の方の姿を見ているので、名称が変わることによる違いや必要性がわからない。
- 今中町長 現在行っている活動もコミュニティ・スクールの1つ。ただ明確になっていないということ。今はまだ地域の子どもへの声掛けや指導までは踏み込みにくい状況がある。教育は学校側に任せるということではなく、子どもを地域の人も含めてみんなで育てていこうという学校づくりが大事だということ。現在していただいている活動に、もう1つプラスするようなことがこれから求められる。
- 松浦教育長 昔は地域のコミュニティが自然にできていたが、現在は核家族化がすすみ、誰がどこに住んでいるかもわからないような状態で地域とのつながりが乏しい。地域の子どもが悪いことをしたからといって叱ってくれるような大人はほとんどいない。そういう背景もあり、国はコミュニティを大切にしたい学校づくりをすすめている。また見守り活動等、教員の代わりに地域の方が活動してくださることで、教員の子どもと向き合う時間の確保につながり、働き方改革の一環にもなるというもの。

宮城委員 ボランティアさんを含め、1人ひとりがどれくらいの使命感を持ってくださるかが重要になってくる。学校側も認識を変えていかないといけないとなると難しい。

渡邊委員 現在の協議会は校長、教頭、評議員での話し合いがほとんど。その他の先生方にも入ってもらって、交流を図る必要がある。先生方の意識も変えていくことが求められる。

東谷委員 学校に子どもがいない地域の方々は学校の実態が見えない。地域の方はそれぞれに意見があっても、届けるルートが少なく、学校や教育委員会へは届いていない現状がある。学校ボランティアだけではなく、いろんな角度から学校を見ていらっしゃる方、興味のある方に参加していただき、いろんなご意見を持っていく。角度を変えて学校を見ていくという部分ではよい制度だと思う。

暁委員 先生方の子どもたちに向き合う時間の確保や地域との交流の面ではすごくよいことだと思うが、立ち上げに時間を要すると思うので、先生の負担にならないか。これでまたその仕事量が増えるような状況があってはいけない。学校に地域の不満ばかりが押し寄せるような状況は絶対に避けたい。

今中町長 問題を探してきて、後の対応を学校や教育委員会に押しつけるようなことはあってはならない。そのあたりの調和をどのようにして図り、協議会を運営していくのか、研修で学んできてほしい。

松浦教育長 人選の難しさもある。どうしても地域の学校に入ってくれる方の顔触れが同じになってしまうので、考えていかないといけない。

岡田主事 上牧町の場合は学校地域パートナーシップ事業というのが母体としてあり、非常に子どもたちや先生と近いところで活動がすすんでいる。それを法的にコミュニティ・スクールという枠に当てはめていこうということ。今後先進地へ行き、うまく発展させていくためヒントや道筋を見つけてもらいたい。そうでなければ、現在のパートナーシップ事業を膨らます形で当てはめていくのがよいのではないかと思う。

教育総務課長より、案件4 その他について

今中町長 学校適正化について。小学校3つ中学校2つを継続していく、義務教育学校として1つにする、統廃合する等いろいろな考え方ができる。継続するなら単学級が出てくるがそれはよいのか、教育学校にするなら校舎はどうするか、また4-3-2にするのか等、考える問題がたくさんある。上牧町で何がふさわ

しいのかをしっかりと考えながら、2年くらいをかけて、方向性をしっかりと示し、保護者説明会、住民説明会、議会に対する説明会をしていく。しっかりと皆の意見を聞きながら、方向性を定めていかないといけないと考えている。

東谷委員

先進地の義務教育学校で勉強したいなという思いがあり、先日研修のお願いをした。数年先には、単学級になってしまう学校がある。現在も上牧第二中学校では小学校から引きずってきた問題をそのまま中学校で抱えていき、その指導に苦勞されている現状がある。単学級になれば、クラスを分けることもできないので、より深刻化する。中学校はこの生徒規模で2つの大きな校舎を抱えているので、改修となると大きな費用がかかる。財政的な負担の問題も大きい。本来考えなければいけない時期が過ぎてしまっているので、できるだけ早く取り組んでいきたい。上牧町は面積が6 km²しかない。人口密度は県下で2番目。この特殊性から考えると、義務教育学校も小中一貫も統廃合もできる。ここを理解してもらえれば、他の市町村よりは問題が少ないのではないかと思う。

今中町長

気になっていることは、上牧第三小学校の周りの分譲地について。町の方針といえばそこまでだが、現実には土地を持ったときに、学校が目の前にあるということで分譲しているの、どうなのか。

東谷委員

学校の生徒の問題だけじゃなく、土地開発の話も絡んでくる。まだ開発の余地が残っており、開発するという将来性が見通しがあるにもかかわらず、学校をなくしてしまうのか。そういった部分も関連してくると思うので、生徒数だけでなく総合的に考えていかないといけない。

松浦教育長

近隣では長らく単学級で続けている学校もあるので、一概に悪いわけではない。それぞれの考え方について何がよくて何が悪いのかということを勉強していく必要がある。大学の教授にもご意見をいただいて、上牧町の土地柄、人口の推移、学校の老朽化の部分も含めて、どうすすめていけばいいのか考えてきたい。

今中町長

委員さんも一緒に大学教授の話聞かせてもらう場を持つことも考えている。上牧町として、何が一番いいのか。メリットデメリット、財政的な問題も踏まえてすすめていきたい。

閉会